

現代英語教授法の展望

— 学習者の立場から従来の教育法を見直し

現況のアプローチ法を考える。—

森 隆 厚

はじめに

英語教授法や学習指導法については、古くは Palmer の理論、近くは Fries の主唱にいたるまで様々なアプローチが英語学の立場から試みられてきたし、現代科学の生んだ視聴覚的な教育機器や教材を英語カリキュラムの中に取り入れる手法も最近では、大学、専門学校、各種学校のみならず、中学、高校など公教育の現場でも積極的に取り入れられている。

しかるに我が国の中学、高校における「英語教育」の諸問題を考える時、依然として継続した課題も存在する。これについては今日まで我が国の英語教育の問題として様々な指摘があり、多くの議論がなされてきたが、結局この問題は最近の英語教育法を見ても改善されているとは言い難い。

すなわち第一に大学などで高等教育を受けた者が、国際的なビジネスシーンや会議の場において必要な実践的語学力を行使し得るかという問題である。

第二には大学受験英語のもつ固有の問題である。これについてはすでに多くの議論が存在するが、要するに、「読んで、文法づけて、訳して、では試験」という指導パターンや、8000もの単語や語句、構文を暗記させる方法が Successful Teaching とされている点の問題である。

第三には学校を出てもほとんど英語を使うことのない多くの中学生に相当の時間をさいて、ローマ字つづりが読める程度の下級英語を義務的に教える

ことの意義がどこにあるかという問題である。

つまり今日のわが国の英語教育は、多くの時間と精力をさく割には、学習効果や習熟度が低いという疑問がある。この問題は専門教育者の間では既に論議を重ねて来たものであるし、この手の類論も少なくはないかもしれないが、英語教師の一人として、新しい英語指導の諸問題を分析し、学んできたラテン語教授法からフリーズに至るまでの英語教授法を取り上げて、何とか新たな視点で、これらを見直し、新しい方法論を模索して、英語教師のつとめを全うしたいと考えるものである。

すなわち本章は、英語教授法の展望として、

- (1) GRAMMAR METHOD
- (2) TRANSLATION METHOD
- (3) GRAMMER-TRANSLATION METHOD
- (4) REFORM METHOD
- (5) PSYCHOLOGICAL METHOD
- (6) BERLITZ METHOD
- (7) READING METHOD
- (8) LANGUAGE-CONTROL METHOD
- (9) ORAL METHOD
- (10) LINGUISTIC METHOD

など伝統的な方法から、今日的な方法迄を論じ、現況のアプローチ法として捉え直してみると同時に、学習指導における視聴覚的な方法や、学習心理学のメソッドの立場から言及し、この小論を成り立たせたいと考える。

1. GRAMMAR METHOD

この手法は、英語学習の初期段階から、文のルールと例外を学ばせる方法である。この場合、文意や脈絡は関係なく、「形式」に指導の重点をおく。内容は一切関係ないのである。一例を掲げると、

- (1) His brother is my father's friend.

- (2) My dear mother, you are eating too rapidly.
- (3) This is a bad manner.
- (4) They are too serious.
- (5) The teacher is quite rigid.
- (6) The murderer has killed many people.

これらの例文を「文法的な切り口」から教えこむと、(1)の例文では、まず「格」を取り上げて、His brother は「主格」、father's は「所有格」で friend は「主格補語」というものであることを教え、時制は「現在」であり、文の種類としては「平叙文」であることを説明していくことになる。次に(2)の例文では、My dear mother は単なる「呼びかけ」でこの文の主格は you であることを、さらに are eating は Be動詞+動詞ing（現在分詞とその機能を説明）は「現在進行形」であることを説明する。

さらに rapidly は副詞で動詞を修飾している点を補足説明する。そして rapidly の位置は前に移動することも可能であると規則や例外も補足しておく。

(3)の例文については「平叙文」であることを例文(1)との関連で説明し、a bad manner が「主格補語」であることは文体の上から容易に理解されるであろうことを確認させる。このようにして文を解剖整理しながら順を追って説明していくのであるが、この方法の問題は、内容的に脈絡のない、いわば文の羅列にすぎないもので、生徒の学習意欲を引き出し、持続させていくことの困難さにある。同型の文章にしても、(1)と(3)の掲げられた順番が逆で「長文」が先にきて「短文」がその後に来ている。また(2)と(4)を比較しても難解な文が先に例として掲げられている。これは指導原則に合っていない。即ち、“short”から“long”に、“simple”から“complex”に移行するのが正しい。

このように生徒の言語習得の過程や学習心理学上の原則を無視して、あくまで「文法」を演繹的に取扱いながら指導していく方法を Grammer Method と呼んでいる。

2. TRANSLATION METHOD

この方法は、ラテン語やギリシャ語のように学術研究の対象として言語を学ぶ要領を英語教授に用いる方法である。文法のルールや例外を教え終えた後、テキストを用いながら、

Where is that cake ? (どこに この ケーキは ありますか)

① ④ ② ③ ⑤ ① ② ③ ④ ⑤

It is in the refrigerator. (それは その 冷蔵庫の 中に あります)

① ⑤ ④ ② ③ ① ② ③ ④ ⑤

日本語の語順 (word order) に単語をおきかえて理解させる指導方法を言う。

発音についてはカタカナ的で構わない。例えば cake はケーキでよく、抑揚 (Intonation) も注意を払わない。また語彙 (Vocabulary) にしても、ある程度上級の refrigerator などがでてきても関係ないのである。また文法的にも漢文の「返り点送り仮名」読みにして、とにかく日本語に置きかえることに重点を置く。

どのようなケースで指導されると有効かと言うと、

- ① 学校が辺境の地や農漁山村にあって、その学校の教育価値が、実践面より教養面にある場合。
- ② 独学で勉強する場合。(何とか辞書や文法書でもって意味はとれる)
- ③ 大学受験指導として。(主として理系生の学生に向いている。しかし最近は理系の大学の入試英語も文法、構文中心になってきている)
- ④ 教材が入手し易い。これは Eliot や Irving, Twain といった英米の文学作品には この様式で書かれているものが多い。

ただ、この方法だと発音面や、文法的視点に欠け、構文や文体の知識が身につかない。

それと常に日本語に置きかえることだけに終始するため、英語学習のダイナミズムに欠け、生徒は自分の言語感覚に頼りがちになり、我流の訳文を作

ることになる。

例えば、

She is very clever. (彼女はとても利口) という文で、この和文を英訳した時に、She is very cleverness. のように日本語の「利口」に充たる名詞を辞書から見つけ出して、そのまま充てはめる傾向を言う。とくにこれは真面目な学生に顕著に見られる。

また、

The mere thought of getting married to such a man nearly drove her mad.

(彼女はあんな男との結婚を考えると、気が狂いそうになった)

これを一旦日本語に訳して、それを再び英訳すると、多くの生徒は、When she thought that she would get married to … のように、the mere thought の時間的に差し迫った端的な表現力が再び出て来ない。訳語を与えたことで満足してしまっているのである。

そこまでは英語学習の一つの段階に過ぎず、真の英語学習にはならないのである。

3. GRAMMAR-TRANSLATION METHOD

Grammar method の指導方法で授業を進める。まず文法のルール、例外の暗記に力点をおき、その後で例文の reading を行い、これを母国語に訳してその意味を理解しようとする。

この方法では文法事項の把握に最も力点がおかれ、訳語を充てはめることが重視される。

このプロセスにおいて Grammar と Translation を行う作業が並存するので、これを Grammar-Translation Method という。

これは Grammar Method と Translation Method のもつ相方の特徴を備えているが、

- (1) 言語学習の特質である音声面の指導が怠りがちになる。
- (2) reading をすることで多少の学習的興味は与えられるが、機会に乏しい。
- (3) 教授方法として英語を使用する機会が乏しく、いきおい日本語の授業のような形態と化してしまうような結果となってしまう。

4. REFORM METHOD

従来の Grammar-Translation, Grammar-Translation Method 方式に批判的なデンマークのエスペルセン (Otto Jespersen) らが中心になり、音声面に重点を置く方法を確立した。

これを Reform Method, 音声学が基盤となっているため Phonetic Method とも呼ばれている。英語学習の導入段階から、意図的に Oral 訓練をくり返し、音声面からの生徒への動機づけを行う。

学校教育では以下のような指導段階を追うことになる。

- (1) 最初に発音記号を教える。
- (2) Reading に移る。
- (3) 視聴覚教材を利用し、語句、文の説明を行う。
- (4) 必要な文法、語法を取り扱う。
- (5) 訳出を最後に行う。

この方法の弊害としては、いくつかの点が考えられる。

- (1) Oral 訓練に時間が費やされすぎる。
- (2) 入門段階の中学生が習いたてのアルファベットと発音記号を混同する。
- (3) 発音記号その物が難解である。
- (4) 文学的な学習志向が薄れる。

5. PSYCHOLOGICAL METHOD

時代に即応し、従来の Grammar-Translation Method 方式などによる文法知識や訳だけの指導より、さらに柔軟性のある方法として、Psychological Method が生まれた。これは幼児の言語習得の過程を観察し、これにならった方法である。つまり幼児のことは行動内容として考えられる。彼らは考える順序に発言する。この心理作用を言語教授に利用したのである。

例えば、まず「起きる」に続いて「立つ」「歩く」「扉のそばに行く」「把手を握る」「扉を開ける」「戸外に出て行く」という一連の行動があり、これを教授の手段として利用すると、

I get up.

I stand up.

I walk to the door.

I stop at the door.

I take hold of the door.

I turn the handle.

I open the door.

I go out.

の順序で指導するのである。その際、新出の単語に直面する度に、その語の発音や意味を結びつけ、後日その発音を耳にするとその動作が心象として浮び、その動作を目にすると、発音が浮ぶように習慣づけるのである。^{*}

しかしこの方法にも弊害はある。例えば、一連の動作は教室内では適用範囲に限度があり、抽象的な事柄の指導が難しい。それでも一連の動作を指導上の参考にすることはたいへん有効である。

*大沢 茂：最新英語教育法

6. BERLITZ METHOD

現在では日本の大都市にも数多くチェーン展開が見られる Berlitz の外語学校はこの流れをくむものである。

すなわち Maximilian Berlitz の考え方は、

- (1) Psychological Method と同様、幼児の母国語習得の過程を追う。
- (2) 学習心理の立場を尊重する。
- (3) 母国語におき代える一切の過程を切り捨てる。
- (4) 外国語の音声をその外国語がもつ意味と関連させて指導するようにする。

日本における Berlitz の学校でも、日本語は厳禁であり、すべてのコースが Native teacher による外国語で考えること、すなわち Thinking in English で授業が行われ、spoken language を習熟するのに効果がある。

Berlitz の指導法では、spoken language を習得することを最大目標としているため、文法事項や Reading さえも初期段階では教えない。これは幼児が母国語を習得する際は文法事項を必要としていないという点を根拠としている。

この方式は短期間で学習効果が得られる点で優れた方法であるが、幾つかの困難な点もある。例えば、多くの Native Teacher を必要とするし、少人数クラス編成が常に基本となる。これらの点で日本の中高の公教育の場には導入しにくい面がある。

事実、日本における Berlitz の language School は授業料が高いことで有名であり、一年分の授業料でマイカーが購入できるほどである。

7. READING METHOD

外国語を母国語に翻訳せず、読んで理解する、即ち「直読直解」で内容を把握すること。これが、Reading Method のめざす目標である。

この方法を唱える米人コールマン (Algernon Coleman) は多読、精読、速読をくり返すうちに、文章の内容や思想を汲みとれ理解が容易になる*と主張する。

しかし簡便な方法で学習効果を得られるだけに、この方法を成立させる上では、教師はよく教材を厳選し、工夫と創意に満ち、魅力ある授業を行わないと、生徒があくびをすることになる。

8. LANGUAGE-CONTROL METHOD

ある限られた vocabulary を理解さえすれば、すべての文をつくるのに役立つという考えから、計画的に vocabulary を制限して文を作る考え方が生まれた。そしてこれを効果的に学ぶことで、小説や戯曲などすべての文学作品理解をめざすのが、Language-Control である。

英国で生まれた “Basic English” の概念では、その語数を 850 に制限しているが、この 850 語の絞り込みは Everyday English の中から使用頻度の高いものを抽出し、英語学習の上で重要なものを多く含んでいる。*

この方法は英語学習の導入段階ではシンプルで分かり易く効果的であるが、残念ながら現在 Basic English による教材はあまり豊富ではない。

9. ORAL METHOD

現在いかなる外国語教授においても ORAL 訓練は重視されているが、その原型である Harold.E.Palmer の主唱する理論を要約すると、「人間のもつ言語学習の自然能力は幼年期にあらわれて、その後一時潜在する。これを再び覚醒させて外国語教育法に利用する。」ということになる。

* Algernon Coleman : The Teaching of Modern Foreign Languages in the United States, 1929.

* I.A.Richards : Basic English and Its Use, London, 1943

Palmer の理論は9つの原則より成り、すなわち、

(1) 始動段階 (Initial Prepalation)

英語学習習慣を定着させる技術を学ぶ。これには(a)聞き取り、(b)発音、(c)直読直解、(d)音声と意味を結びつける。が含まれる。

(2) 習慣形成と修正 (Habit-Forming and Habit-Adapting)

音声による反復練習が習慣の定着に必要であり、母国語の習慣も修正し得る。

(3) 正確さ (Accuracy)

生きた英語の標準に一致すること

(4) 程度 (Gradation)

英語学習における難易レベル

(5) 比率 (Proportion)

英語学習の4技能 (Hearing, Speaking, Reading, Writing) を順守する。

(6) 具体性 (Concreteness)

実例による具体的な説明

(7) 興味 (Interest)

学習に対する興味づけ

(8) 合理的進行順序 (Rational Order of Progression)

(a) 音声から文字、(b) 音声の流れ、(c) 文から語、(d) 直読直解から訳

(9) 多面的学習 (Multiple Line of Approach)

目的達成のための多角的なアプローチ

これらが Palmer の主張であるが、これに対し当然ながら、読解を重視する立場からの批判があり、日本では国情に適さないとの意見もある。

10. LINGUISTIC METHOD

これは2つの方法論から成る。1つはアメリカ軍が兵員訓練に用いたA.S.T.P. (Armed Services Training Program) と呼ばれたもので、これはまず言語学習に対する姿勢を捉え直し、文型 (Form) と意味 (Meaning) の研究に重点を置き、小人数制と集中授業に特徴がある。

もう一つは、例のミシガン大学教授フリーズ (Charles Carpenter Fries) が提唱する Oral Approach で会話や出版物など日常使用される言語を分析し、どのように使用されているかを調査、研究したもので*、現在では米国の大学の入学資格に必要な英語力を短期間で習得させることに成功している。

これらは言語理論に忠実に指導されることで到達点に立つという考えに立脚している。

最後に

以上述べてきた通り、外国語の教授法研究の歴史はキリストの生誕と同じほど歴史がある割に著しい理論的進歩、発展が見られず、大きく変化したとは言いがたい。英語教育法を考えた時に、哲学のような言語学の理論や、学習心理学などに支えられたシステマティックな指導プロセスを持たねばならないとすると少々うんざりする。

しかし科学者が明確な理論や実証を持っているのと同様、英語教授にも専門の理論と知識、さらにある種の実証を持っていないとならない必要性を感じる。

* 語学教育研究所：外国語教授

* C.C.Fries : Teaching of English

確かに英語教師は生徒に英語を有効に教えようとする。定型的な英語教育の範囲内において、上記のような言語学理論的背景を持ち、さらには生徒の学習心理を熟知し、指導方法を創意工夫し、指導技術を磨かねばならない。

以前、大学受験の予備校で受験生を相手に英語指導の経験を持つが、集団学習の場で、多数の受験生を相手に、大学入試問題の出題傾向を分析し、予備校の方針や受験生の要求を入れて、指導法の研究を重ねた上で、指導マニュアルを作成し指導の均一化を図ったが、結局テキスト及びその指導マニュアルといった図式と脈絡だけでは指導の統一は図れないことを悟った。

そこには必ずヒューマンスキル (human-skill) が存在し、教師によって独自の指導法が生まれてくるのである。“テキストで教える”ことはあり得るが、“テキストを教える”ことは実現しにくいことが判明したのである。

確かに教師という者は概して唯我独尊的な人物が多い。だからといってやたらに独りよがりな考えに走ったり、自分だけのルールを正当づけてはならない。常にクラス運営の原則に従い、グループダイナミズムを尊重し、個別の問題はあくまで例外的な処理をし、科学的な教授理論の根拠を有し、刷新的な指導技術を模索せねばならないと考える。

例えどのような教授理論や方式を採択するとしても、どのような場合でもそれは手段に過ぎないのである。

生徒の学力向上結果や効果が評価 (Evaluation) となって判定される。それこそが Successful な教授方法論であることを英語教師として改めてここに認識したい。

— 参 考 書 目 —

- 渡 辺 益 好「新しい英語学習指導」／リーベル出版 1980
前 田 忠 夫「新説英語教育法」／篠崎書林 1962
岡 倉 由三郎「英語教育の目的と価値」／研究社 1911
青 木 常 雄「英語教授便覧」／金子書房 1950
福 原 麟太郎「英語教育法」／研究社 1948
羽 鳥 博 愛「学習中心の英語教育」／大修館 1980
大 沢 茂「最新英語教育法」／南雲堂 1958

- 奥平 光「街の広場」／研究社 1962
 桜庭 信之「英米の風物地誌」(英語科ハンドブックス 6)／研究社 1959
 研究社版「英語教育講座」／1970
 語学研究所「外国語教授法」／1943
 東京教育大編「聴視覚教育」／1953
 Jespersen, Otto : How to Teach a Foreign Language
 ／London : George Allen & Unwin. Rpt, 1962
 Coleman, A : The Teaching of Modern Foreign Languages in the
 United States／University of Chicago press, 1933
 Palmer, H.E. : The Principle of Language Study／英語教育研究所, 1925
 Fries, C.C. : American English Series (BK1-6)
 ／University of Michigan Pr. 太田朗訳・研究社 1957
 Dale, E. : Audio-Visual Methods in Teaching／KDKA 1935
 Richards, I.A. : Basic English and Its Use／Oxford University Pr. 1955
 (石森幸太郎訳「文明批評の原理」)／垂水書房 1965

<雑誌>

TESOL Newsletter

／TESOL, Georgetown University, Washington, D.C., U.S.A

「英語教育」(The English Classwork)／開隆堂 1954, 10

「英語教育ジャーナル」(The English Language Education Forum)

／日本外交協会 1983. 4

「英語の窓」／中教出版 1960. 5

Audio-Visual Language Journal

／The Audio-Visual Language Association, Yarm, Cleveland,
 U.K. 1978. 11